



第45回「おかねの作文」コンクール

街の活性化のために

鹿児島県・鹿児島市立鹿児島玉龍中学校 2年 盛山 桜子

私の住む家、暮らしに一番近い街は、^{てんもんかん}天文館です。小学校の校区内で、そのころからよく出かけていました。市の中心となる位置にあり、アーケードがきれいなその街は、私がとても好きな場所です。

今年になって、家族で外出に出かけることになったときのことで。私と妹が、どこに行きたいなどとあれこれ話していると、父が「天文館の店にしよう。」

と言いました。天文館のお店に外出に行くことがなかったというわけではないけれど、今までに「天文館の店」と指定して行ったことはなかったため、私も妹も少し驚きました。どうして指定したのか私には分からず、父にたずねると、「天文館の活性化のためだよ。」

と父は言いました。私は、活性化というのは天文館がどうなることなのか、私たち家族が食事をするのがどうして活性化につながるのかがよく分からず、父の話をくわしく聞きました。

その話によると、昔の天文館は今よりもにぎわっていたそうです。父は、昔から鹿児島市内に住んでいたわけではないから、人から聞いたり調べたりしたそうです。私は、今のにぎわいしか知らないから驚きましたが、確かにデパートなどでもお年寄りばかりのときがあります。その原因は、市内に大きなショッピングセンターなどができたことです。新しいお店にお客が集まり、元々にぎわっていた街は少しさびしくなったのです。だから、父が一番近く、市の中心である天文館でお金を使おうとしていたのです。

「天文館はお父さんが小さいころから遊びに行っていた街というわけではないけれど、みんなが新しいところに集まるときに、天文館でお金を使えるのは、やっぱり近くに住んでいる人だよ。」

という父の言葉が、とても心に残りました。





確かに私も、遊びに行くとなると、雑貨や若い年代向けの店が多く集まっているショッピングセンターに行くことが多いです。でも、考えてみれば、小学校のころから家族でよく出かけていて楽しんでいた場所は、家から近くて身近な天文館です。だから、たとえ自分の本当のふるさとや地元ではなかったとしても、何か行動をおこしたり、そこでお金を使ったりできるのは身近に住んでいる人です。決して他人事ではないと思いました。それはきっと、自分のふるさとではなくても、そこで自分が暮らしていて、自分なりに街を思っているからです。同じお金を使うならば、私をいつも楽しませてくれている、身近な街で使いたいです。

それに、天文館の客が減ってしまうと、街全体のにぎわいが欠けていくだけでなく、経済的に直接関わってくるのは店の人の暮らしです。私たちの天文館をつくってきてくださったのは、一つ一つのお店の方のおかげです。だから、その人たちが経済的に困るようなことがあれば、その人たちの暮らしがかかっていることだから私も心配です。経済的に苦しくなって店をしめるところがあると、少しずつ街がさびしくなっていくます。

今年の5月に、天文館に映画館ができました。今まで私が映画を見に行くとなると、天文館よりも遠くへ足を運ばなければならなかったため、とてもうれしく思いました。しかし、それは普通に映画を見るだけでなく、意味や目的あつてつくられた映画館だったのです。

私は、映画館ができた記念映画を、家族と見に行きました。その映画は、天文館に映画館ができるまでの人々の取り組みを再現したものでした。それを見て、私はとても驚きました。昔、天文館に映画館はあったのです。それが年々減っていき、一つもなくなってしまいました。そして、近年、天文館のにぎわいが弱まっているのをどうにかできないかと思い、天文館に映画館をつくろうと立ち上がった人たちがいたのです。資金を集めたり、計画を立てたりするうえで、周りから反対されることもあったけれど、街のために映画館はできました。

今、人々から「天パラ」とよばれ、少しずつ親しまれている映画館を見ていると、それをつくってくださった方々の、街への思いが感じられます。にぎわいを取り戻すためにつくられた映画館、そこに人が入っていくところを見ると、私もうれしくなります。

私が天文館の活性化のためにできることは、とても小さなことに過ぎません。できるだけ天文館で買い物をしたり、開催されるイベントに行ってみたりと、一つ一つは





小さいけれど、それでも街のために何かしようとする事、その気持ちはむだなものではないと思います。大好きな街のために……、それが私にとって一番すてきなお金の使い方なのです。

